

その日の教室で、僕はミズキちゃんの机に意外なものを発見した。

「あれ、ミズキちゃん、これどうしたの？」

カラフルでポップな字体が踊る、シヤカシヤカした袋。その中に入っている飴を、ミズキちゃんは丁度舐めている途中だったらしく、口をもごもごさせながら答えた。

「知らない？ 最近流行ってるやつだよ」

「いや、知ってるけど、ミズキちゃんが持つてるのが意外だし」

「えー、そっかな？」

少し笑いしながら、ミズキちゃんはもう一つ飴を取り出し、僕の手につけてくれた。

「ありがとう」

特にねだつたつもりはないけれど、厚意は素直に受けとろう。カラフルな個包装を剥がしてあめ玉を出すと、口の中に放り込んだ。パチパチというかシュワシュワというか、ちよつと珍しい刺激と、ヤマブドウの風味がふんわりと口の中に広がる。何度か食べたことある味だが、結構おいしい。

「これ、本当に効果あるのかな」

「うーん、わかんない。変わったーって言ってる子も居るけど、ぼんやり色が違うようにも見えるかなって程度だよ」

自身の頭から生える小さなツノを触り、ミズキちゃんは苦笑いした。

この飴は、僕ら鬼の子学級が一番トレンドなお菓子だ。舐めているとツノの色が水玉模様になったり、ピンク色や黄緑色になったりするらしい。僕たちのツノの素の色は、大体土色や泥色といった、華やかとは言えない色をしている。大人になれば、美容室で染めることも出来る

けど、ツノの発達に影響するとか、風紀が乱れるとかない。とかで、鬼の子学級の子供達にはまたその資格がない。だから、お手軽に大人のファッションを味見できるこの飴が人気になるのは必然だった。

まあ、『効果には個人差があります』という注意書きが書いてある通り、なかなかツノの色がはつきり変わる子はいない。それでも皆こぞってこの飴を毎日舐め、鏡の中のツノを覗き込み、今日は少し明るい色になった気がする！ などと言って、教室で騒いでいた。

「こういうの、ミズキちゃんは好きじゃなさそうだなって、勝手に思ってた」

「当たってるかもね、それ。特に好きなわけじゃないかな」

小さくなった飴を噛み砕いて飲み込んだミズキちゃんは、袋に手を入れてもう一つ飴玉を口の中に放り込む。

「でもま、色が変わるといいなーって」

ミズキちゃんは、鬼の子学級の中で一番成績がいい。誰よりも先に百個もある鬼ヶ島の位置と特徴を覚え、誰よりも先に豆上げレベル百のテストをクリアして、表彰されていた。校長先生が数年の一度の天才だとかなんとか騒いでいた。

ミズキちゃんは、そんな自分の才能をひけらかしたり、鼻にかけることはしない。僕みたいな平々凡々な鬼でも気軽に話しかけて仲良くなれる雰囲気、いつも微笑んでいる。

ただ、ミズキちゃんはとても自分の意志が固い子だった。学級の皆がデコ棍棒に凝って、ラメやらリボンやらドラゴンのキーホルダーやらを付けたときも、振りにくくなるからの一点張りでも一つも飾りを付けようとしなかった。そのおかげか、やっぱり棍棒素振りの大会でも優

勝っていた。それに、鬼のパンツ柄じゃないパンツを着てきたと噂された子が、皆にからかわれていたときも、ミズキちゃんだけは絶対にそれに加担せず、ズボンを脱がせようとしたガキ大将を見咎め、「やめなよ！」と叫んでいた。

ミズキちゃんは周りに流されず、正しく、そしてとても優しい。そんな彼女の友達であることが僕はとっても誇らしいのだ。だからと言って、この飴をミズキちゃんが舐めていることに嫌悪感を抱いたわけでは決してない。ただ、効果がほとんどないだろうとわかりきっていてなお、流行っているうさんくさい飴を、ミズキちゃんがこんなな舐めていることは、やっぱり僕にとって意外だったのだ。

「……私さ、来月転校するじゃん？」

特にこれ以上追求するつもりはなかったが、僕の視線に何かを感じたのか、ミズキちゃんは口を開いた。

「人里の方の、桃太郎学級に」

「ああ、うん」

ミズキちゃんは、お父さんが第二東鬼ヶ島の棍棒産業のリーダーに大抜擢されたとかなんとかで、来月引越してしまう。半年くらい前に先生に言われたそれが間近に迫っていることに、僕は曖昧に返事をしてうつむいた。

「人間の友達ってさ、やっぱりツノはないんだよね」

「そうだね」

「そしたら、少しでもかわいくしてから行きたいなって思ったんだ」

飴を転がしながら、ミズキちゃんは飴の袋をいじる。

桃太郎学級の子達には、学校交流みたいなもので、何度か会うことがある。人と鬼も、現代においてはきちんと交流して共存していかないと、生きていけないのだ。

彼らは決して悪い子じゃなかった。昔習っていた歴史のようにキジだのサルだのを引き連れて乗り込んでくるわけでもないし、刀を振り回すわけでもなかった。ごく普通にゲームをして話をして、握手なんかもしてくれし、集合写真も撮った。

けれど、どうしたって、教室の後ろに貼られた集合写真を見る度に思う。彼らの黒髪の中には、僕らのようなツノはうずくまっていけないのだ。

そしてミズキちゃんはこれから、そのツノなしだらけの中でたった一人、ツノを抱えて写真に写らなければならぬのだ。

「皆と離れるのは寂しいけど、行きたくないわけじゃないんだよ」

「うん」

「お父さんの仕事が上手くいって欲しいなって思ってるし」

「うん」

「人間の子達と遊んで話せるのもうれしいし」

「うん」

「でも……。どうしても思っちゃうんだらうなって、今から思うんだよ」

「何を？」

「あの子達の頭には、私と同じものはないんだなってうつむけていた顔を上げて話すミズキちゃんは確かに、嫌そうな顔はしていなかった。ただ、少し困った顔をしていた。

「そんなの、見た目だけなのよね。中身には何も関係ないのね。だめだなあ、私」

「ミズキちゃん」

ミズキちゃんはとても優しい。見た目で差別したり、

からかったりすることを嫌う。相手がそれで傷つくことを嫌う。

生まれつき、ツノが片方だけ小さい僕のこと、絶対に笑わなかった。学級中で彼女だけが、「何にもおかしいことないよ」と言ってくれたのだ。

「ミズキちゃんのツノ、僕がかわいくしてあげるよ」

「え、本当？ どうやって？」

ミズキちゃんが僕の言葉に、驚いたように目を見張った。

「前に雑誌で見たんだ。糸で編んだツノカバーみたいなやつ。あと、お姉ちゃんが前にリボン巻いてかわいくするの、友達とやってた。あと、お風呂入ったらとれちゃうけど、ペンで模様描くやつとか。ね、いっぱいあるよ、ツノをかわいくする方法」

身振り手振りで必死に説明する僕は、滑稽かもしれない。けれど、僕の大切な友達が、胸をはって行けるように、したかった。

「だからさ、一緒に研究しよ。ツノがあるミズキちゃんほとつてもかわいいんだからさ」

一息にそう言った僕をじっと見ていたミズキちゃんは、やがてちよつと照れたように微笑んだ。

「うん。ありがとう」